

暮らしを見直し創造する循環型環境施設

T18Z008 出井満里奈

池田動物園

1960年にできた、国内でも珍しい山の地形を利用した動物園。岡山県最大の動物園で、約100種類の動物が飼育されている。ナイトZOOやライブなど新しい試みにも力を入れている。しかし、動物の高齢化、資金難などさまざまな問題を抱えている現状がある。

生涯学習センター

子どもや親世代へのイベントや老人向けの講座が開設されている。人と科学の未来館サイビアや太陽の丘公園が同敷地内にあり、プラネタリウムや大きな公園があり週末は家族連れが見られる。

コンセプト

ものの循環に着目することで人々の暮らしにも環境にも優しく生きるための提案とその行動の継続を可能にする施設を提案する。地球から得たものが加工、生産、運搬されて私たちの手元に渡る。それらを消費し、廃棄したものが処理され、地球に還される。当たり前に行われている循環であるが、この循環について知る機会は少ない。

中でも「廃棄」について学び考え行動することは、良い循環への切り口になると考え、「廃棄」を中心に計画を進めた。

敷地について

敷地は周辺に岡山県生涯学習センターや人と科学の未来館サイピア、池田動物園がある、京山ロープウェイ遊園地跡地（現：京山ソーラーグリーンパーク）とその周辺とした。

この場所に計画することで、老若男女の学びの場である地域のもつ特色が、きちんと生かされると考える。

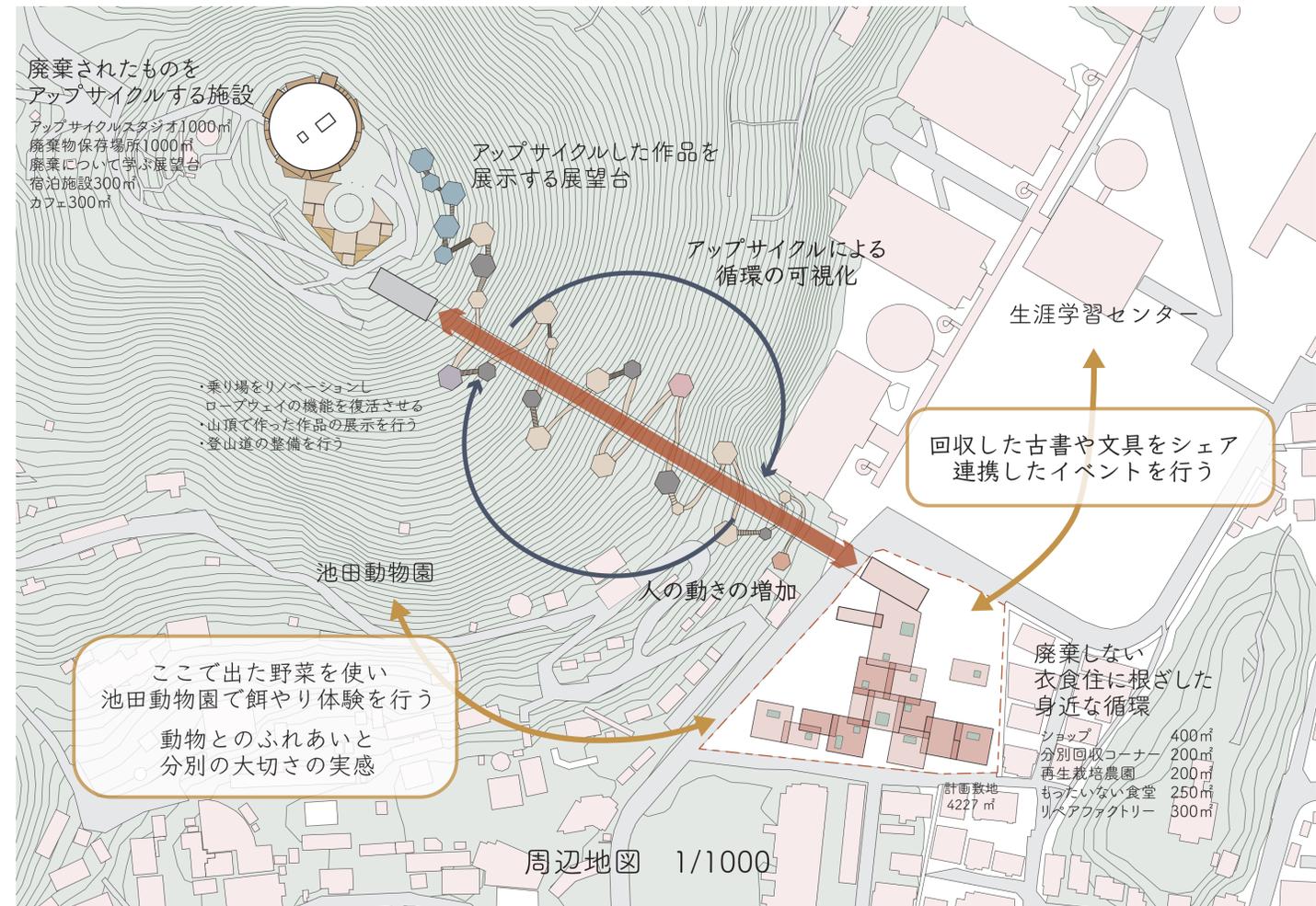
計画について

山の麓にはものを消費し廃棄するまでに必要な機能を、周辺施設と連携しながら計画した。ゴミを出さない工夫をし機能を配置する。ここで出た食材を活用して、池田動物園での餌やり体験を行う。動物との触れ合いの場を設けると同時に分別の意義を体験する。また、中央に分別回収コーナーをもうけ、集まった古本や文房具を生涯学習センター内で利用したり図書室と連携したイベントを行ったりする。

山頂には廃棄されたゴミのアップサイクルを行うレジャー施設を計画する。ゴミを分別し保管・販売を行う倉庫と、ゴミに価値を生み出す工房を設計する。そこでできた作品は、展望台や登山道に展示を行う。

加えて、現在廃棄されているロープウェイ乗り場をリノベーションし、機能を復活することで、麓と山頂の機能を繋ぐ。元ある施設の機能と連携し設計することで地域の特色を生かす。

麓では衣食住に根ざした今日からできる身近なことを継続し、山頂では少し広い視野を持ってゴミについて考え新たな価値を見出す。この施設を通して、人々の行動がいつの間にか環境問題の改善につながる行動に変化し、現在の環境について生涯を通して学び続けることを期待する。



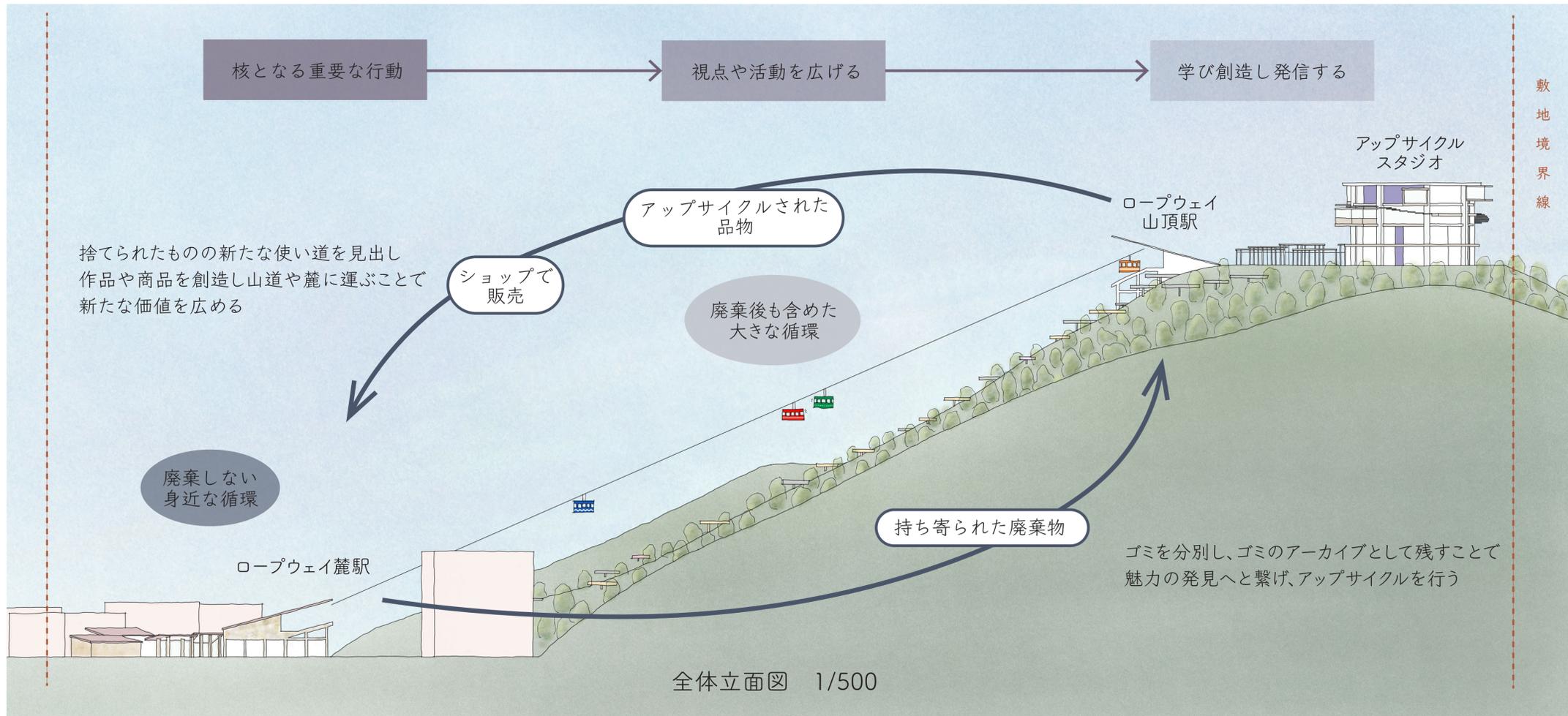
既存の建築物を

活用しながら施設の魅力を高めることで地域全体の特色を生かし魅力を高める



現：ロープウェイ乗り場麓駅

山頂にも対になるデザインの乗り場が存在している
どちらも廃棄されている現状がある



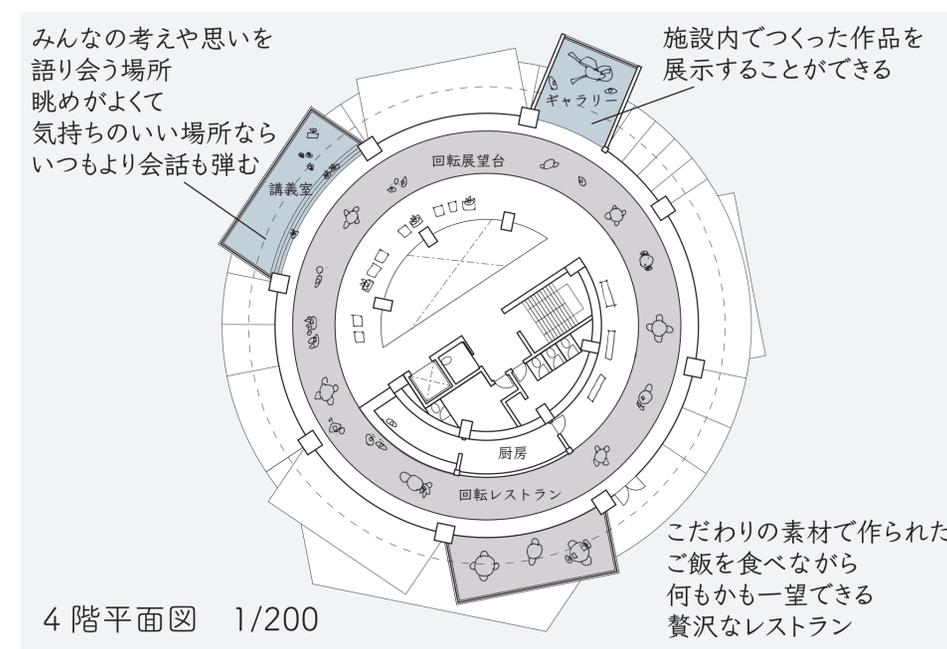
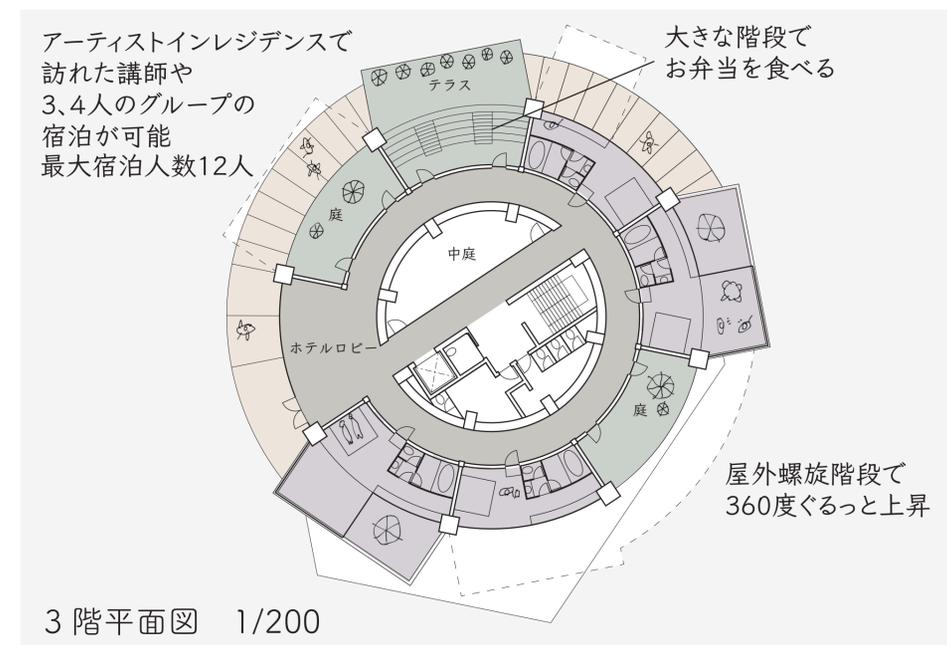
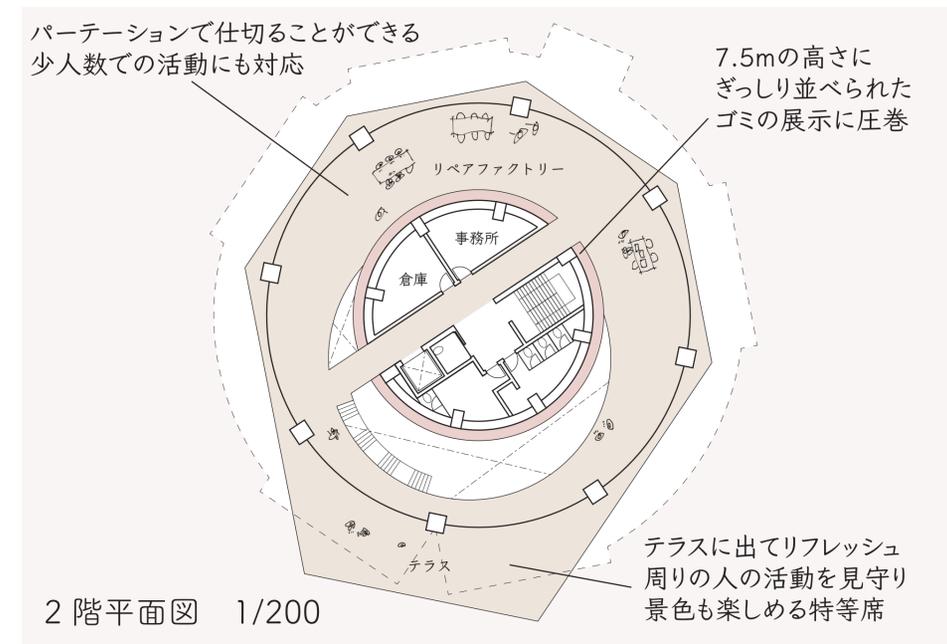
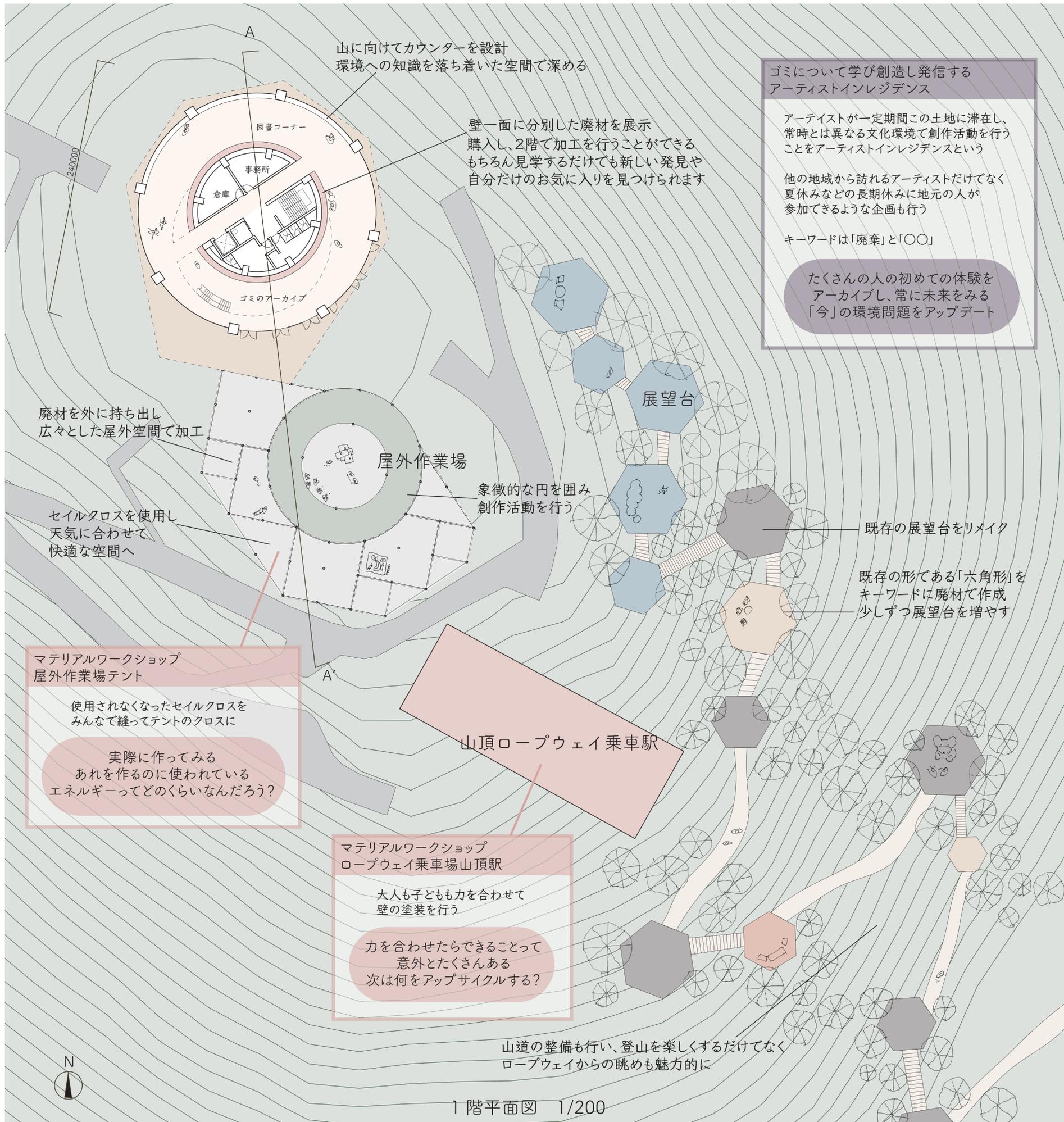
京山ロープウェイ跡地

現在は活気もなく一部の人が利用している
しかし建物のシルエットは当初から同じである

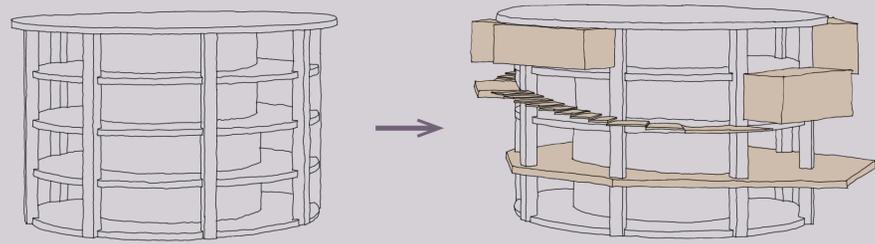


展望台

現在は木が生い茂りどこに展望台が存在するのかわからない
斜面から少し浮いたデザインが連続している

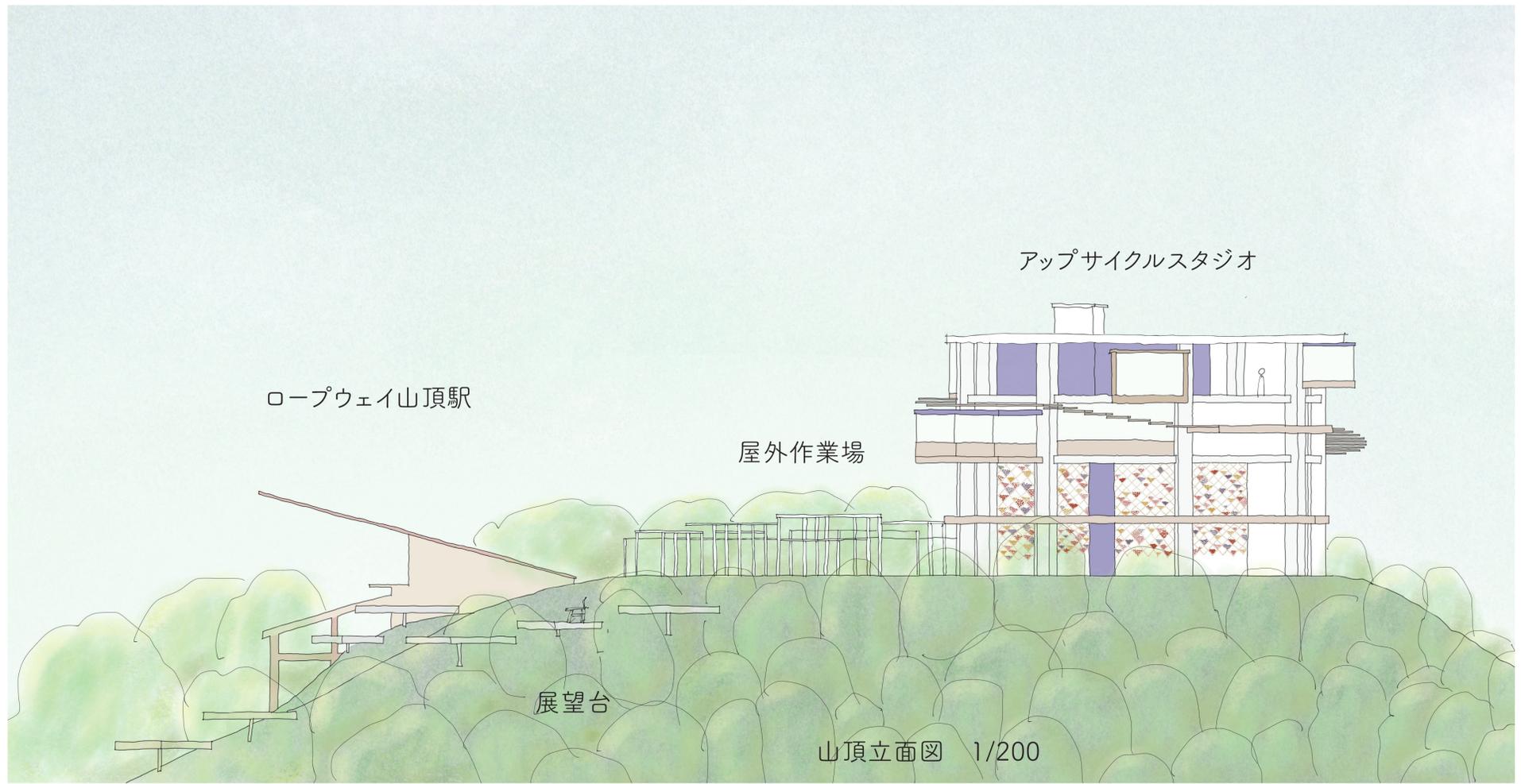


ダイアグラム



建築当時からほとんど変わらない
円柱状の建物
内外がはっきりとしている

円柱に凹凸を加えることで
内外の連続性を生み、
自然を感じられるようアップサイクル



アップサイクルスタジオ

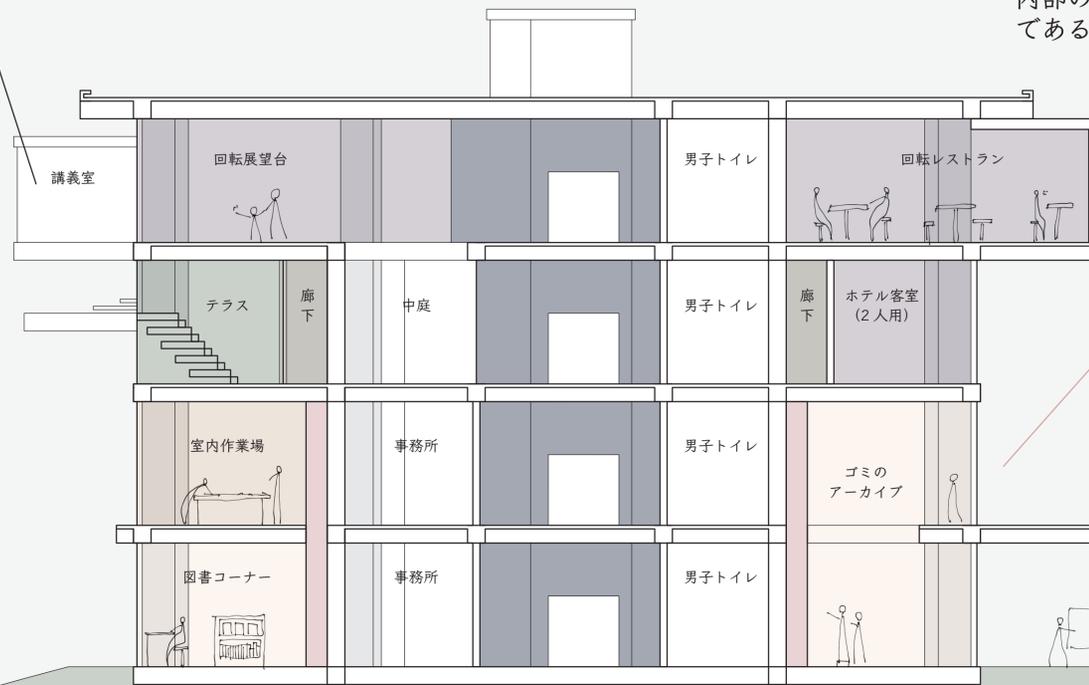
ロープウェイ山頂駅

屋外作業場

展望台

山頂立面図 1/200

岡山の景色を一望することができる



既存の建物の特徴である、
円柱状のシルエットと
内部の筒が鮮やかな青色
である点を残したデザイン

岡山を一望することのできる京山で
自然を感じながら、ゴミのアップサイクルを行う

マテリアルリユース
既存の窓ガラスを
1階2階の全面窓に再利用

作品物販、飲食店の出店を想定し、
自由に使えるようにゆとりを持った設計にした

回転レストランの
循環へのこだわり

地産地消
地域の食べものを
地域でいただく

身土不二
旬の食べものを
旬の季節にいただく

場所や時間の流れに逆らわず
本来の循環に触れてみる

屋外作業場

山頂断面図 1/100